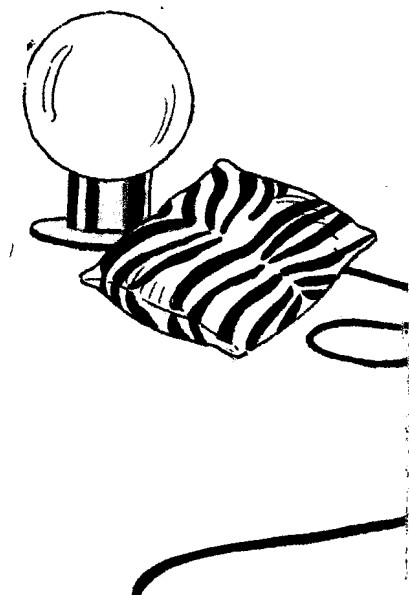


恋にあつふあつふ

長編小説

恋にあつふあつふ



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―三
(郵便番号112)

光文社 文芸編集部

長編小説 恋にあつぷあつぷ

一九八四年一〇月五日 初版第一刷発行
一九八五年四月五日 第三刷発行

著 者 田 辺 聖 子

発行者 大 坪 昌 夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二―三/郵便番号112
電話 東京(〇三)九四二―二三四一(代)
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 公 和 印 刷
製本所 関 川 製 本

定価九八〇円

目次

第一章	アキラ	5
第二章	ヒロシ	55
第三章	鷹野氏	103
第四章	ジツ	183
第五章	再びアキラ	233

装
幀
林
静
一

恋にあっぷあっぷ

田
辺
聖
子

第一章
ア
キ
ラ

その一家は週末に越してきた。土曜の朝八時ごろから、お隣りでは、

「どん、ズズズー」

（これは家具を置いたか、動かしたか、したらしい音）

「トントン、タンタン」

（釘でも打ちつけてるのかしら）

「よいしょ、よいしょ」

のかけ声——などが、一日中、聞こえていた。ヒロシは（私の夫である）、

「やっぱり来よったんか、アイツ」

と悪意のある言いかたをする。

もつともヒロシはわりに何にでも悪意のある言いかたをする男である。悪意というよりも、優越の感じられる声、というほうが正しい。

ナゼカ、彼はすべてに対して優越心を持ってるらしい。自分をとても偉いもののように内心、思ってるみたい。

そういう男は臭みがあつてイヤな奴^{やつ}のはずであるが、意外と私、好きなんだ。だから結婚して

もう五年も経っている。私の友人の栗原マドカなどには、

「五年！　へーえ、人それぞれねえ。五年も一人の男にくっついてるなんて、あたしなら自閉症になっちゃうわ」

なんて冷笑されるが。

そういうけど、ヒロシは、内心はいさぎよいところがあつて、あんがいお人好しなのである。

優越心、というのも、すべて自分が庇護しないといけない、面倒みないといけない、という義務感から出発してるようだ。それは彼が長男だという環境と無縁ではないらしい。指図好き、差配好き、ああしろこうしろ、とわりに口やかましい。しかし話のスジを通しさえすれば、無茶はいわない男だということも、いまでは私にもわかつている。そうして、曲がったことはしない。

ヒトの足をひっぱるとか、裏を搔くとか、ちゃっかりたちまわるとか、そういうことは絶無である。その代わり、そんな性質の男には、

（オレ、まちごうたこと、いうてえへん）

（オレのいうことに、まちがいあるか）

という気負いがあるから、それが臭みとなることもあるが。

いや、ヒロシのことではないのだった、お隣りなんだ。

私は、お隣りに好奇心をもち（私は好奇心に富んでるほうだと思ふが、それも人にいわれてそうかなあ、と思うのであつて、自分では好奇心と知らず、好奇心を抱いてるのだ）、前住者が引っ越してから、次はどんな人が来るのかと思つていた。前住者は定年退職した老夫婦だったが、余生を田舎で送るといって鳥取へ帰ってしまった。

日曜日も一日、お隣りでは騒がしかったが、午後、私が外へ出てみると、一段落したのか、お隣りの主人が玄関前の手すりにもたれて、ぼんやり煙草をふかしていた。「あの男」だ。

文化住宅、と関西でいうんだけど、まあ、いわば西洋風棟割り長屋である。でも一戸建て風によう見せかけるべく、設計上の苦心が払われたとみえて、五軒あるどの家も、それぞれ、入口とそれにつづく三、四段の階段を持っている。

道路より高い傾斜地をうまく利用してあるらしいのだけれど、玄関前の階段に、家によつては一段ごとに花の鉢を置いたりして飾っていた。

お隣りといつても、ドア同士が接しているのではないから、もしお隣りを訪問しようとする、こちらの階段をいったん下りて、またお隣りの階段をあがらなければならない。

まさにそういう感じで、お隣りはある。

その玄関前の、小ちっぱけな、テラスともいえない空き場所で、お隣りのご主人は煙草をふかしている。

私を見て、

「やあ」

といった。私は笑った。

「住み心地はいかがですか」

「まだ二十四時間と、それに七、八時間プラス、——というところですから、住み心地もなにも」彼は私に話しかけられたのが、率直に嬉しううれしかった。私の好奇心と弾み心がすぐわかったようだった。喋り易しゃべそうに喋る。

「だけど何となく、肌合いがよさそうな予感がします。住み心地の肌合い、がね」

「だんだん、もっとよくなればいいけれど」

「オタク次第です。よろしくお願いします」

「あ、こっちこそ」

「といって私は、からかう口調になった。

「なんで、ウチ次第なの？　ウチが何かの責任を感じなきゃいけないの？」

「いやその」

「越してきて下さいって、頼んだわけじゃないわ」

「もちろんです。ふつうの意味でご近所づき合いをして下さい、と聞いたかっただけ」

「それなら、いいんですけれど」

と勿体ぶって私がいったら、もう、それこそこらえかねたように彼は笑った。その感じは、彼がふだんよく笑う男、大阪でいう「ゲラ」（ゲラゲラ笑う人のことを「ゲラ」というのである）

だからではなくて、笑いたいのだけけど、ふだんの人生ではなかなか笑う機会がない、たまたま笑える機会にむしゃぶりついて有頂天——になった、のではないかという想像を、私にチラと与えた。

男が「笑いたい」という根源的な本能をもってるなんて、私は考えることもできなかった。男はみな「本当に」心から笑わないもの。

ヒロシは、笑うのはきらいじゃないだろうけど、男にはもともと、笑うほどおかしいことは人生には少ない、と思いきんでる風だし、私の祖父は笑ったら損という顔でいた。祖父にいわせる

と「男は三年に片頼」、三年間にやっと片頼だけニヤリとするぐらいでいい、という。父に至っては、おとなしい人だったから、笑うのをあきらめるというか、父がこの男みたいになき出し笑いをしたのを見たことがなかった。父も祖父も、もう亡くなってるけど。

会社に勤めているとき、私は同僚の男子社員たちが笑うのをよく見たけど、「笑う」ということについての沸騰点が低い感じで、何かにつけ、ゲラゲラ笑ってたけど、ほんとに心からおかしがって、というのではなさそうだった。

しかし、この新しい隣人の男は、心からおかしそうに笑う。それは私としやべってるせいかもしれないと思わせた。トシはいくつなのかしら、ヒロシと私のあいだぐらいかもしれない。ヒロシは三十四で、私は三十一なのである。ヒロシはちよつと背が低い、がっちりした四角い軀からだつきで、どんな嵐にも飛ばない重石おもしか、文鎮ぶんちんのような感じだが、この男は、痩せぎすらしい見かけで、そのぶん、軽そう、心もとない印象だった。

標札はまだ入っていないが「風早」という姓であるのは知っている。ヒロシが「やつぱり来よったんか、アイツ」といったのは、私たちは前に、彼に会ってるからである。

ヒロシは、西宮にしのみやの奥まった山地の中に少しばかり土地を買っている。いつかはここに家を建てて、泉南せんなんの団地にいる両親を呼び、同居しようという計画を持っている。（もちろん私もともに住むのである）

いまはまだ家を建てる余裕がないのと、あまりに山間の僻地なので通勤に不便、というところから、土地はそのままにおいてある。ここは、ヒロシの父親の古くからの知人である風早氏と、共同で買って、きちんと境界をきめ、風早氏が九十坪、ヒロシが六十坪、というふうに分けてあ

ったのだった。

そういうのはみんなヒロシがしている。彼が金策をしたり、決定したり、企画をたてたりするのである。彼はほとんど私に相談しないし、私はされてもわからない。

風早家のほうは、ひとあし早く、その九十坪の土地に家を建て、息子夫婦らと住んでいるようであった。いつだったか、

「鶏小屋をおたくの空地に置かせてもらってもいいだろうか」という連絡がきた。

「あの爺さんのしそうなこっちゃ。あの爺さんは県の公園課に長いこと勤めてね。定年後も嘱託で造園の仕事やって花なんか作ってる。空地が勿体ない、思たんやろ、セコい爺さんやからな」

ヒロシはいい、しかし別に今すぐ家を建てるというのではないので、承諾したらしい。そのあと、生みたて卵を十こばかり持って、長男が来た。とつつきにくい偏屈そうな男だったが、私もヒロシも喜んで家に上げて、卵十こぶん以上の歓待をした。ヒロシが偉そうなことをいうわりに、根はお人よしだというのは、こういうところをいうのである。

それからまたしばらくして、ヒロシにとっては驚倒すべき悪いニュースが伝えられた。「風早の爺さん」は、ウチのものたるべき空地にすこしせり出して、離れらしき建物を建てている、というのである。

同じようなときに、そのへんの土地を買ったヒロシの友人が、たまたま発見して、

「いよいよ、建てるんか」

と電話をかけてきた。

「いや、まだ手エつけてない」

「おかしいな、オマエとこの土地に大工だいくが入りこんでたデ」

「いつや」

「ふた月ぐらい前になるか」

ヒロシは怒りくるい、日曜になるのを待ちかねて、現地へいった。

「あたしもいくの？」

「いったら、

「当たり前やないか、あほ！」

とどなられた。

「いったい風早の爺さん、何を考えとんのか、ほんまにウチの土地へ食いこんどったら一大事やないか！」

「そうね」

と私はいったが、何しろその土地も、ヒロシが見つけて、ヒロシが風早氏と組んで、ヒロシが金策して、ヒロシの名義になってるものだから、私にはすこしヒビキがにぶいのだった。土地の境界線に食いこまれたということが「ヒロシにとっては驚倒すべきニュース」という、所以ゆえんなのである。

その土地は、買うときに一度見たことがあったが、まわりは竹藪たけやぶの高台だった。持ち主は百五十坪、二百坪、というように大きく分けて売りがついていたから、ヒロシは風早氏と組んだわけである。山の中というか山の上というか、西宮から支線に乗って、その終点から出るバスが一時

間に二本という僻地だった。それも朝夕だけで、昼間は一時間に一本しかない。停留所にバス発着時間表が掲げてあるが、ほとんど白々として、ごく気ままに数字がばらまかれてあり、いかにも気乗り薄、といったバスの運行状況であつたのだ。

こんなところに住めないわ、と私は内心思ったが、ヒロシは、

「十年たつてみい、開発進んで、ずっと便利になる」

という。あたりはぼつぼつ、というところで家が建ちかけていた。ただ眼下に大阪のまちが横たわる眺望はよかつた。夜になればさぞ美事な景観だろうと思われたが、そのかわり平地よりは、二度寒そうである。

交通至便で暖かい阪神間に生まれ育つた私は、こんな寒い山頂で自分の家に住むよりも、小さくても便利で暖かい町なかの借家住まいのほうが、

(ずっといい！)

と思つたが、何しろヒロシがもうきめてしまったことなので、口には出さないでいた。

行つてみると、はじめて土地を見たときよりは、格段に開けた感じで、竹藪はすっかり消え、家があちこちに建つていた。風早家は大阪湾に向いて建ち、一部二階建ての和風の家で、いかにも、

(しすました)

というか、

(してやつた)

というか、誇らしげに肩肘^{かひこ}いからせ、その家の格にしては、大きすぎるような、いかめしい冠^{かぶ}